お使いと育成と攻略と

「んー……わちぁ「古匠」にゃあ届いとらんけ、これを直すこつは無理じゃけぇの」

「そうか……となるとヴァッシュの兄貴にお願いするしかないか」

「たわけっ！」

「ひばし！？」

　脛に金属の棒は駄目だろう……！ 駄目だろう……っ！ 弁慶だって泣くんだぞ！？

脛を抑えて悶絶していると、怒っていますと身体全体でアピールするビィラックがべしべしと俺の頭を叩く。しれっとエムルは頭の上から退避してやがった。

「なんでもオヤジに頼るんじゃない！ オヤジやてワリャに構ってばかりじゃないけぇ！」

「え、あー、すんません」

　ヴァッシュも大概ランダムエンカウントだ。毎度兎御殿にいるわけではない、それにビィラックに怒られた以上今すぐヴァッシュに頼ってこれを修復するのは困難だろう。好感度が落ちる予感がする、クソゲーで鍛えられた俺の地雷(フラグ)を嗅ぎ分ける直感は八割当たる。

「さーてどうすっかなぁ……」

「どうするんですわー？」

「んー、久し振りに攻略進めてもいいけどなー」

　さてどうしたものか、とりあえず特技剪定所に行ってスキル整理しつつ大量獲得したポイントを割り振っちゃおう。

————————————

PN:サンラク

LV:78

JOB:傭兵（二刀流使い）

4000マーニ

HP（体力）:40

MP（魔力）:50

STM （スタミナ）:100

STR（筋力）:70

DEX（器用）:70

AGI（敏捷）:90

TEC（技量）:65

VIT（耐久力）:2

LUC（幸運）:104

スキル

・無尽連斬

・グローイング・ピアス

・インファイトLv.MAX

・ドリフトステップ

・セツナノミキリ

・ハンド・オブ・フォーチュンLv.6

・グレイトオブクライム

・クライマックス・ブーストLv.9

・六艘跳び

・リコシェット・ステップLv.1

・ヘイト・トランプルLv.1

・ムーンジャンパー

・孤高の餓狼(トランジェント)

・オフロードLv.2

・致命刃術【水鏡の月】参式

・イグニッションLv.1

・オーバーヒートLv.1

・ニトロゲインLv.1

・デュエルイズム

装備

右:兎月【上弦】

左:兎月【下弦】

頭:凝視の鳥面（VIT+1）

胴:リュカオーンの呪い

腰:無し

足:リュカオーンの呪い

アクセサリー:格納鍵インベントリア

————————————

　素晴らしい、スタミナと幸運がついに三桁の大台に到達したぞ。今後インベントリアを使うことも考えてMPなどの数値にも手を入れたが、もはや俺はまごう事なき幸運戦士と言えるだろう。VIT先輩は貫禄の一桁、装備品で補強すれば四桁は見込めそうなステータスの気配がするのに一桁を維持し続けるそのガッツは敬意すら感じる。いや、やったのは俺だけど。

「ご一緒にぃ、スキルの秘伝書はいかがですかぁー？」

「お金が貯まったらな」

「ぷぅ」

　ぷぅ、じゃないよぷぅ、じゃ。隙あらば何か買わせようとしてきやがるなこの兎。

　今回のスキル整理はほとんど弄らない事にした。オプレッション・キックにアサシン・ピアスを混ぜたらヘイト・トランプルなるなかなか面白いスキルが生まれた事くらいか。怯み状態の相手に使えばヘイトを大量に集めることが出来る、というのはヘイト管理的観点からしてなかなかに優秀だ。致命刃術【水鏡の月】、ヘイト・トランプルという真逆のヘイト操作スキルを得ることが出来たのはありがたい。

　いくつか得た新しいスキルは効果を検証しつつ育てていく感じで……ん？

「育てる……育成……そうか、無いなら集めればいい、手に入れればいい、育てればいいのか」

　そうだよ、ヴァッシュに頼れないなら現状頼ることが出来るのはビィラックくらいしかいない。ビィラックは「名匠」の職業しか持っておらず、「古匠」の職業技能がなければエーテルリアクターは修理できない。

　だがビィラックは未だ修行中の身と何度か言っていた、つまりそれはビィラックというNPCには「名匠」キャラとして固定されたキャラクターではなく条件を達成すれば成長(・・)する可能性があるのではないだろうか。

「エムル、予定が決まった」

「なにをするんですわ？」

「名付けて「ビィラック育成計画」……！」

「と、いうわけで「古匠」ジョブ取りに行こうぜ」

「何が「というわけで」なんじゃ……」

　先ほど叱った相手が意気揚々と「無いなら取りに行こうぜ！」とか言い出したら俺も多分今のビィラックと同じ顔をするだろう。巨大な金槌を肩に乗せ、毛が黒くてよく分からないが頬についた煤を拭うビィラックは俺の言葉に呆れたような顔をする。

「むぅ……オヤジに頼れんならわちを古匠にする……理にゃ叶っとるが……」

「別に神匠になれと言ってるわけじゃない、だがいつかは通らなければならない道だろう？」

「ううむ……」

　クルンクルンと人間が使うショートソード程はある金槌を回しながら考え込むビィラック。エムルやエルクのような現実の兎とほぼ同じか少し大きい程度ではなく、俺の背丈の半分はある大きさのビィラックがそれを振るうとまるで大剣を振り回しているようにも見える。

「……うむ、わぁーった。ワリャの案に乗ってやるけ」

「グッド、実にグッドだ」

　ビィラックが承諾してくれたことも、ビィラックというNPCに「古匠」適性があるということも、どちらもグッドだ。

「どうせワリャは知らんじゃき、わちがオーダーを出しちゃる。エムル、地図ぅ持ってき」

「は、はいなっ！」

　数分後、何やら魔法媒体ではない、一般的な意味でのスクロールをエムルから受け取ったビィラックは、金床の上にそれを広げる。

「ええけ？ 「古匠」になるにゃあな、二つ必要なもんがある」

「というと？」

「まず一つは神代の遺産……「機遺装(レガシーウェポン)」。武器を扱う職業ち、机上(きじょー)の空論(くーろん)じゃ鉄は打てん」

　ふむふむ。

「そしてもう一つ、オヤジ曰く……「マーリョークウンヨーンユーニット」っちゅーものが必要になるらしいんじゃ」

　厳かに必要となるアイテムの名を唱えたビィラックだが……何か引っかかるな。マーリョークウンヨーンユーニットー？

　まーりょーく……うんよー……ゆーにっと……まりょく、うんよー、ゆにっと……

「……それ、もしかしなくても「魔力運用ユニット《マリョクウンヨウユニット》」じゃね？」

「……………………そうとも言うかもしれんな」

　いや絶対そうとしか言わないって。なんだよマーリョークって、ニューヨークの姉妹都市か何かか？

「と、ともかくじゃ！ 「古匠」になるためにゃあな、「稼働する機遺装(レガシーウェポン)」と「マリョクウンヨーユニット」が必要なんじゃ！」

「稼働するレガシーウェポン？ ってのはこれでいいのか？」

　ゴトリ、と金床に広げられた地図の上に格納鍵インベントリアの格納空間の中から適当に選んだ「規格外武装:太刀型【ハービンジャー】」がオブジェクト化する。今はエネルギーが通っていないのか暗くくすんでいるが、その蒼い刀身は多少の違いはあれど間違いなくあのウェザエモンが使っていたものと同型の武装だ。

「んー……ん？ んん……？？ んんん！？ んんんあ！？」

　凄い、驚異の五度見だ。プルプルと震えるモコモコした手で【ハービンジャー】に軽く触れたビィラックは、それが幻覚ではなく本物であると理解したらしい。

「ワ、ワリャ、こここ、これ……」

「ウェザエモンを倒した時にちょっとな。レガシーウェポンってのがこれも該当するかは分からないし、さっき俺が見せたエーテルリアクターを修復しないと稼働しないが……」

「……「古匠」になる為に稼働する機遺装《レガシーウェポン》ち必要になるんは神代の技を識る(・・)ためじゃき。稼働する、ってのは「仕組みを理解できる程度には部品が残っている」っちゅー意味じゃ。ほぼ新品のこれならなんの文句もない！」

「そ、そうか……」

　今にも跳ね回りそうなビィラックにどこかデジャヴを感じつつも、俺は【ハービンジャー】をインベントリアに戻す。

「分解(バラ)すならあいつらの承認がいるからなぁ……」

　クランを結成した後、色々調べた検証の結果分かったことがある。このインベントリアの格納空間は「共用」なのだ。少なくともあの時ウェザエモン戦で入手したインベントリアは全て同じ格納空間に繋がっていた。つまり非常に面倒なことに、インベントリア内に最初から入っていたアイテムは俺、オイカッツォ、ペンシルゴンの三人に所有権がある。

　恐らく個人が取り出して使用するだけならまだしも、売却や破棄をする場合は俺だけではなく他二人の承認も必要になるという厄介なシステムだ。

「うむむ……も、問題はもう一つじゃけ。オヤジ曰くマリョクウンヨーユニットはここ……「去栄(きょえい)の残骸遺道(ざんがいいどう)」にあるらしい」

「去栄の残骸遺道……」

　その名前はビィラック育成計画以前に俺にとっては無視できない名前だ。いや、この場所ではなく厳密にはこの次(・)のエリアに用があるのだが、どちらにせよこのエリアは攻略の必要があった。

　ユニークシナリオEX「致命兎(エピック・オブ・)叙事詩(ヴォーパルバニー)」、その次の段階へ進むに当たってヴァイスアッシュより課されたお使いクエスト。

・受信装置Δ(デルタ)

・座標装置Δ(デルタ)

・送信装置Δ(デルタ)

　これらのアイテムを集めて来いと言われ、どこにあるのかと問うたところ帰ってきた言葉が「無果落耀(むからくよう)の古城骸(こじょうがい)」……マップで言うのならば現状、いやアプデ前までの攻略最前線の拠点とされていた十五番目の街「フィフティシア」。そこへと繋がる四つのエリアの内の一つであり……「去栄の残骸遺道」を超えた先の街「イレベンダル」から挑む事になるエリアなのだ。

「なんの因果か、フォスフォシエから直通ときたもんだ」

　ヴォーパルバニーの手で作られたのか、サードレマで見かけたものよりも詳細に書き込まれた地図を改めて確認し、目下の目的とこの先の目的を含めてどう動くかの予定を立てる。

「とは言ってもフォスフォシエから真っ直ぐ進むだけか」

　他のエリアに興味がないわけではないが、目的の為に最短を行くのであれば目的地にたどり着く為、次に攻略すべきはフォスフォシエから続くエリア……「奥古来魂(おうこらいこん)の渓谷(けいこく)」だ。

「だが問題はどうやって兎二匹を連れてフォスフォシエを抜けるかだな……」

　流石に白頭巾で街中を駆け回るのはやる気が起きないし、どうも人間に変化(へんげ)する例の魔法も喋るヴォーパルバニーなら全員が使えるワケでもないらしい。

「またマフラーの術をやるですわ？」

「わちも久しぶりにファーコートの術をやるけぇのう……」

ブルータス、お前もか。

うーん、どこかで今現在のマップ描写を入れたいけど文章が無駄に長くなっちゃいそうだしいっそのこと挿絵にしちゃおうか……